

ネオ・アナキズム

政治から倫理へ

ジョージ・ウドコック／中村健二訳

アナキズムの伝統が現代のラジカルな若者たちに伝え残すべきことがあるとすれば、それはまず第一に、その全ての関係が政治的というよりむしろ倫理的であることによって特徴づけられるような未来社会のヴィジョンであろう。権威の崩壊を生きのびるだけでなく、さらには自由で自然な同胞愛の絆で社会を繋ぎとめる——アナキストは人間の中にこのような強力な倫理的衝迫があることを信じる。最近の一連の事件——公民権運動、黒人街の暴動、持たざる国の富める援助国に対する行動など——に見られるように、物質文化の中においてさえ、非物質的価値を求める要求がおこってくる。それは理不尽ではあっても、説得力のある要求と云うべきだろう。人間相互の関係は本質的に倫理的なものであり、政治は人間関係の全てを取込むことはできない——これはアナキストがくりかえし主張してきたことである。

アナキストはこうした非物質的価値を志向する中で、たことはない。南スペインの貧しいアナキスト農民たちが、どれほどしみじみと彼らの自由を満喫していたかを知らずには、ジェラルド・ブレナンやフランツ・ポルケナウによる感動的文章を一読すれば足りる。彼らの新しい村落コミュニティが貨幣制度の桎梏から脱れるためには、彼らは酒やタバコばかりかお茶やコーヒーマですすんで絶とうとしたのだ。

偉大なアナキストたち（いまわたしの念頭にあるのは、一九四〇年代の歴史的な運動を代表する、アナキズム最後の苦い戦いを闘った保塁守備者たちではない）は自然で、自発的で、組織されないことを絶えず強調した。彼らにとつては個人の判断が至上のものであり、ドグマは個人々の持つ生活の本質についての理解を妨げるものである。生活はできるだけ質素で、自然に近いものであるべきだというのが彼らの信条であった。こうした質素で自然な生活様式に対する衝迫こそ、クロポトキンのような人々の関心を、緊急に解決を迫られた問題として、近代都市における人間疎外や田園破壊に向けさせたものなのであり、これは現在のニュー・ラディカル（公民権運動に始まり、ヴェトナムで新しいアメリカのヴィジョンを問うた、中産、大学改革を問題にする階級の青年層を中心とするアメリカの活動家たち）にとつても重要な問題であろう。アナキストは専門家にによる統制の危険をたえずおそれてきた。バクニン¹は職業的・科学的に對する敵意を隠さなかったし、科学教育を受けたクロポトキン²でさえ、科学の発達に果たす素人の役割の重要性を強調した。物質的要求に応えるために、職能班やコミュニティ村落・市区を組織しなければならなくなった場

TUC（イギリス労働組合会議）やAFL-CIO（アメリカ労働総同盟差別会議）が労働者を物質的に富裕階級のレベルに引上げるのをくろむのとは対照的に、清貧の理想を掲げる。ポール・グドマン³（一九一一年生まれ、アメリカの小説のほか、社会評論）がくりかえし書いてきたのもこのことであるが、われわれは特に『戦争と平和』（二八六）の中の格調高いあの詩的な文章を忘れるべきではない。そこでブルードン⁴が説いていることは、ポーバリズムとポヴァティ⁵の区別なのだ。ポーバリズムが窮乏を意味するのに対し、ポヴァティは人が仕事によって自分の必要を満たすに足るだけのものを手に入れる状態のことだと彼は言う。こうしてブルードンは詩的なことばをつらねてこの状態こそ人間の理想であると称揚し、そのとき人は最も自由であり、われわれは感覚と欲望の支配者となつて、自らの欲求を浄化すると説く。物質面において、アナキストは人を自由たらしめるに足る以上の充足を求め

合、責任はその問題にいちばん密接に関っている人たちに委ねるべきだというのがクロポトキンの考えであつた。人は自ら判断を下せるようにならなければならぬ。問題に直接関っている人たちこそ、それが彼らに影響するものである限りは、その適切な決定者である——こうした強烈な当事者即決定者意識は後にブルードンの連合主義の基盤となつた。彼が頭に描いていた社会像は、その性格が産業的・社会的であるような機能集団によつて組織されている。人々は職場や居住地において何をなすべきかを自ら決定していくが、この第一段階の上に、そしてつねにこの段階に則して、必要止むを得ざる少数の国家的・国際的・制度的組織が、それもあつた限りゆるやかな連合主義の方式にのつて構成される。全ての段階にわたつて人々ができるだけ広く参加するが、最下位の段階、つまり職場と居住地において、参加は全員をまき込む完全なものとなるだろう。

こうした考えが今日のニュー・ラディカルを強く惹きつけるものである。またじじつ、ニュー・ラディカルが半ば意識的に過去のアナキストの思想を取込んでいくことは容易に察しられる。しかし、アナキストが今日の若者の関心を先取りしている事実の中でおそらく最も興味深いことは、われわれだれもが経験しており、彼らがそうなることを固く信じていた、人間と仕事との有機的関係の消滅に対する憂慮であろう。ゴドウィン⁶はすでに一七九三年、『政治的正義に関する研究』（最初の重要なアナキズム文獻）を書いたとき、オートメーション時代、

● 全ての関係が政治的というよりむしろ倫理的であることによつて特徴づけられるような未来社会のヴィジョン

● 偉大なアナキストたちは自然で、自発的で、組織されないことを絶えず強調した

● ニュー・ラディカルは半ば意識的に過去のアナキストの思想を取込んでいる

そしてわれわれが直面しかけているお仕着せの余暇時代の到来をきわめて適確に見通していた。

現在、樹木の伐採、運河の開鑿、船舶の運航には多大の労力が必要である。それは将来においてもつねにそうであるうか。人間の發明考案になる複雑な機械類、紡織機や蒸気機関など種々の動力機を見るにつけ、人は自らの生み出す省力手段に驚かないだろうか。こうした類の改良にもいつかは終りが来ると一体だれに言えるだろう。……いま概観したような進歩から結論されることは、人的労力の必要がいつに終焉するときが到来するというのではないだろうか。

一七五年前にはおそらく今日よりもっと大胆な結論と思われたであろうが、ゴドウィン¹は人が平均して一日せいぜい半時間も働けばすむような時代がやがて来ることを予言したのである。人は残りの時間を人間性の陶冶にあてることができるだろうというのだ。ほぼ四半世紀後、『パンの略取』(一八九二)を書き進めながら、クロポトキン²はさすがにこの先輩よりは慎重であって、次のような示唆をするにとどめたが、その示唆するところの行きつく先に、いまわれわれ西洋世界はさしかかっている。全ての人間が「二十ないし二十五歳から四十五ないし五十歳まで一日五時間」働けば(と彼は慎重な中にも思いついた断定をしている)、社会の物質的充足は保証されるだろう。しかしクロポトキンは、今日われわれにも徐々に明らかになってきていることであるが、近い将来に必要とされる僅かな労働量よりも、工場やオフィスから解

放されたあとの長い時間の方がより重大な関心事であることもまた認識していた。あのもう一人の古い絶対自由主義者ウィリアム・モリスの表現を借りれば、『無用の労働』³が取り除かれていまや自分で『有用な仕事』⁴を見つけないければならないという新しい事態、そしてそのことから派生する問題にわれわれはいま直面しているのである。クロポトキンは過剰労働の問題が解決されたとき、人は創造的な形で新しい状況に対応するだろうと楽観的に信じていた。

人間はその唯一の生活目的が飲んだり、食ったり、雨露をしのぐ場所を作ったりすることであるような動物ではない。人間にはその物質的欠乏が満たされると、別の欲求が前面に表われてくる(一般に、それらは芸術的性質のものだと言つてよいだろう)。これらの欲求はじつに多種多様であって、全ての個人ひとりひとりによって異なるものである。社会の文明化が進めば進むほど、個性も複雑化し、欲望もいっそう多様化してくる。

一八九二年クロポトキンはそう書いた。今日のニュー・ラディカルたちの問題の捉え方も全く同じだろうとわたしは思う。もつとも、彼らの多くがはたしてこれほどに楽観的であるかどうかは疑わしいけれども。

わたしはどのような鞭撻にも応えるつもりはないし、またどのようなレッテルもお断りしたが、これまで述べてきた絶対自由主義的思考態度の多くを、わたしがいまでも大いに共有している事実にかわりはない。とい



ゴドウィン

●八お仕着せの余暇時代Vについてのゴドウィン、クロポトキン、モリスの示唆

って、わたしはいまそうした態度への共鳴者を募っているわけではない。わたしのプロバガンディストとしての時代は終わったのだ。しかし、一歴史学者として、わたしはある一連の思想現象にきわめて強い関心を抱いていて、それはわずか十年前には、十九世紀労働運動の死馬にくくりつけられたものとしか見られなかったのに、今日では青年や中産階級の間で新しい仲間をよびよせ、六〇年代の提起する諸問題に対して、若者たちが求めている答えの少なくとも一部を示すもののように思われる。

かつて古典的アナキズムの一部をなしていた要素のあるものが、現在ではもはや見られなくなったことにもわたしは関心を寄せている。パリケードや革命的ヒロイズムについて、人はもはや昔日のごとく語ることをしなくなったし、直接行動がニュー・ラディカルたちの絶えず口にする言葉であるとしても、その内実はガンジール⁵の市民的不服従にきわめて近いものであって、オールド・アナキストが耳にしたら、あからさまに軽蔑の色を隠さなかったであろうと思われる。しかし、こうした変化は全て好ましいものであるとわたしは思う。さまざまな理由から批難の対象となった歴史のアナキズム運動の数々の呪縛から、有益な絶対自由主義的観念が解放されたことをそれは意味しているからである。過去のアナキストたちは、マルクス主義に対して烈しい敵意を抱いていたにもかかわらず、形骸化した十九世紀の左翼思想をあまりに受け入れがちであった。階級闘争を社会の支配的建設的エネルギーとして捉える見方や、暴動主義と

テロールに対するロマンチックな崇拜、さらにはプロレタリア独裁のヴィジョン——これは一元的労働組合によって支配される社会を論じ、アナルコ・サンディカリスト特有の思想で、一般のアナキストがそれを受け入れることはめつたになかったが——などがその例である。今日アナキズム思想を公然と、あるいは無意識に唱える人たちは、おおかた旧左翼のイデオロギーのお荷物と一緒に、こうした時代おくれの観念を捨てさっている。パターニンの革命戦術は、ベルンの志操堅固な市民たちとともに葬られている。パターニン自身と同じように、いまでは死せる過去のものである(パターニンは一八七六年ベルンの病院で客死した)。絶対自由主義的な観念や衝撃が若者たちの間にどれほど深く滲透し、彼らの社会観や倫理観にどれほど深く影響を及ぼすとしても、そうした観念の探求をめざす運動が再び甦えることは、まずありえないと言つてよいだろう。

彼らが実現をめざしていた社会に関して言えば、アナキストは決して完全主義の夢想家ではなかった。彼らは未来に柔軟性をもたせておこうと願つたし、こまごまと手の込んだ計画は、その立案に参画しなかった後代の人たちに徒らに負担をかけることになると思つていた。この点に関しては、ニュー・ラディカルも賛成するだろうとわたしは確信する。しかしながら、オールド・アナキストの未来観には、その一面において融通のきかない厳格なところがあった。完全無政府社会かしからずんば死かというような、硬直した非妥協的態度がそれである。

●古典的アナキズムの一部の要素は、現在ではもはや見られなくなった

●パリケード、革命的ヒロイズム、テロール

オールド・アナキストたちは、そうした目標がついに達せられた光明の時代には一度として際会しなかったの
で、名譽ある不成功の記録があとに残ったが、これはい
まではアナキズムの大きな長所である。

今日西洋では、いかなる形のものであれ、画一的社會
を創り出すことの可能性を本気で信じている人は誰一人
いないだろうとわたしは思うし、ロシア人でさえそうし
た希望は急速に捨てつつあるのではないだろうか。皮肉
なことには核滅亡の脅威にさらされているおかげで、われ
われはもはや窮極目標を設定して未来を考えることはし
なくなつた。未来はその前方も両側面ともに開かれて
おり、現在見とおせるかぎりの判断を言えば、われわれ
はおそらく多元構造世界に入つていくであろう。そこで
は多くの哲学、様々な制度形態、ニュアンスを異にする
種々のアプローチが見られるだろう。

換言すれば、アナキストが独自の社會を創り出すこと
は決してあるまいということなのだ。彼らが夢みた自由
社會は、ウィリアム・モリスの『ユートピアだより』
〔二八九〇〕の中で描かれていた絶対自由主義的牧歌社會
と同じように、榮しくはあつても現実とはかけはなれた
神話でしかない。物質的にも社會的にも錯綜した現代世
界が、こうした単純な解決を許さないことは明らかである
。しかしだからと言って、絶対自由主義的伝統の中か
ら現われてきたものもろの觀念が、アナキズム・ユート
ピア思想の域外では、つまり現実世界ではなんらの當面
性も持たないということにはならない。わたしがすでに



▲クロボトキン

示唆したとおり、一つ一つを取上げてみれば、それらは
今日の問題にしばしば顕著な関連性をもっているのであ
る。同時に、そうした觀念の有用性は、アナキズム思想
の現実的側面を重視する人たちが、いくつかの根源的容
認をおこなつてはじめて發揮されるものだ、わたしに
は思われる。

古典的アナキストは、たとえば絶対自由主義的社會の
創造には權威主義的社會の崩壊が先行しなければなら
ないと信じていた。しかし過去五十年の歴史が示すよう
に、權威主義的社會の革命による破壊は、その代りによ
り効率的な強制社會を生み出す傾向があるのだ。じつさ
い、社會の自由化は突然に開示されるアポカリプティッ
クな過程ではなく、遅々たる進化の過程であり、一つ一
つの部分的變革に精力を集中することによってのみ達成
されるのである。われわれが予測する未來社會において
は、何がしかの規制が必要であることは明らかなのだか
ら、こうした變化はあらゆる規則を排除することによつ
て達成されるべきではない。そうではなくて、權威主義的
で官僚的な方法が明らかに失敗している、あるいは行き

すぎている領域を捜しだし、絶対自由主義の唱道する權
力・制度の分散、自由意志の尊重、決定への直接参加と
いった觀念を實地に適用していく努力の積み重ねによつ
て、それは達成されるべきなのだ。以上のことがらを容認
することから暗に示唆されることは、絶対自由主義的基
本的教義に依然ならぬかの價值を認めている人たちにと
つて、次の事實、すなわち過去のアナキストたちは倫理
的であるかのようによそおつてはいたが、かつてアナキ
ズムが真に政治性を脱したことはなかったという事實を
認識すべき時が来ているということである。これまでア
ナキズムとは、つねに手段を異にして行なわれる政治の
異名にほかならなかつた。このような認識は絶対自由主
義的確信を懐いている人たちを解放し、彼らを既成の政
治的枠組みの中で必要と思う社會的變革に向かわせるだ
らう（言うまでもないが、政治的枠組みもまた變化するも
のである）。

最後に、人間の本性について、歴史的アナキストが認
めていた以上にもっと実存的な見方が受け入れられなく
てはいけない。人間は生まれつき社會的な存在である
（たとえ生まれつき善ではなくても）、とアナキストは信じて
いた。こうした仮定は、その前提として途方もなく理想
的な狀況を予想している。自由と物質的充足と精神的外
傷を癒す時が与えられれば、人は完全な社會性を發揮し
て行動しはじめるだろう、というわけだ。しかし、これ
もユートピアの幻想であつて、おそらく實現されること

はないだろう。われわれは刻々と移り変わる現在に生きて
いるが、その中であつて大方の人はベシキストが予想す
るほどに無責任ではないだろうし、オプチミストが認め
る以上に慢性的に反社會的な人間も、少数ではあるが、
るのである。どのように定義していいかわからないが、
これがわれわれの経験から断定できる人間の本性なの
だ。それゆゑ、われわれはこのような人間の本性を認め
た上で、反社會性が他人の生活を侵害するときにはそれ
を抑制しなければならぬ。とは言つても、その目的は
現実存在している人間に対して、できるだけ多くの自
由を保持することであつて、現実には存在しない理想的
人間のために、仮定上の全き自由を夢想することであ
つてはならない。

おまえがいま書き記しているようなものは、もうアナ
キズムとは言えない——わたしには昔の同志たちがそう
不平そうに呟いているのが聞こえる。そうかもしれない
。しかしわたしの意図したことは、アナキズム思想家
たちの建設的洞察を、社會の形成にさいして實際的で
有益な影響を及ぼしうような脈絡の中に位置づけること
であつた。彼らの洞察は、それと不可分に一体化して
きたのである。われわれはいまや政治・社會問題をこれ
までよりもっと大つびらに、そしてより多元的に考える
ようになつていくが、この事實のおかげで、絶対自由主
義的傳統の中から現われてきた觀念は、社會形成におい
て極めて重要な役割を演じることができるとだ（ここで

●權威主義的社會の革命
による破壊は、より効
率的な強制社會を生み
出す傾向がある

●人間の本性について、
歴史的アナキストが認
めた以上に実存的な見
方が受け入れられる必
要がある

わたしの言う社会とは、アナキズム・ユートピアではなく、現代の膨大な科学技術的変化の産物として現実に存在していくであろう世界のことである。しかし、このことが可能になるとしても、それにはまず次の条件が満たされなければならない。すなわち、ポール・グドマンがじつに立派な手

本を示しているように、絶対自由主義者がすすんで社会批判をし、社会改革の提言を理想化された未来とではなく、現に目の前にあって急速に変貌しつつある現在と関連させようとしなければならないということである。
(訳)なかもら けんじ・東京大学助教授・イギリス文学)

【訳者付記】

この論文は「アナキズム再訪」と題して、アメリカの「コメンタリ」誌(一九六八年八月)に発表されたエッセイの後半を訳したものである。(表題は訳者がかりにつけた)。省略した前半で、ウドコックは彼個人のアナキズム運動との関りを述べながら、運動としてのアナキズムから離れるにいたった経緯を記す。次いで、イギリス、オランダ、アメリカにおける新しいアナキスティックな現象を概観し、この現象と旧アナキズムとの相違を詳説している。省略部分の前半では、著者が晩年のオーウェルと知り合い(蛇足ながら、ウドコックは「水晶の精神——オーウェル研究」を書いて)、アナキストが自発と自由意志を主張するにもかかわらず、結果としては倫理的独裁におちいるというオーウェルの指摘に同意していく告白が注目されるし、後半では六〇年代アメリカのニュー・ラディカルに代表される新しい動きに注目し、それがたんなる政治の枠にとどまらない倫理的な生活意識の変革であると捉えて、そこに「絶対自由主義」としてのアナキズムの新しい相貌を見ようとしている点に注意を惹く。

この論文に類出し、仮りに「絶対自由主義的」と訳した *libertarian* という形容詞は「個人における思想・行動の自由を主張・擁護する」の意であって、その反対である「権威主義的」と対応する。言うまでもなく、著者はその点にアナキズムの本質を見ているのである。なお、この論文がウドコック自身の手になるすぐれたアナキズム通史『アナキズム』(一九六二)の一つの補遺であることは、同著を知るものには明らかだろう。

訳文中、鉤括弧「」で付した註は全て訳者のものである。ニュー・ラディカルについては、本間長世氏の御教示を受けた。

Anarchism Revisited by George Woodcock. Reprinted from *Commentary*, by permission; copyright © 1968 by the American Judaic Committee